江戸時代の写生図にみられる絶滅鳥カンムリツクシガモ *Tadorna cristata* (Kuroda)

柿澤亮三・菅原 浩

Twenty Japanese Sketches of Extinct Crested Shelduck *Tadorna cristata* (Kuroda) from the Edo Period (1603-1867)

Ryozo Kakizawa* and Hiroshi Sugawara**

Abstract *Tadorna cristata* (Kuroda) is known only from three extant specimens. The first, a female, was taken near Vladivostok in 1877, and preserved in the Copenhagen Museum. The second specimen, also a female, and the third specimen, a male, were taken from near Fusan, Korea in 1916, and 1913 or 1914, and preserved in the Yamashina Institute for Ornithology. The first specimen was described in 1890 by Sclater, and it was then considered to be a hybrid between the Ruddy Shelduck (*Tadorna ferruginea*) and the Falcated Duck (*Anas falcata*). In 1917, Dr. Nagamichi Kuroda described the second specimen and gave it the name *Pseudotadorna cristata*. The inconsistency between Sclater's hybrid view and Kuroda's new species view was solved in favor of the latter, when Kuroda obtained the third, male specimen, and described it, along with the discovery of four sketches of the Crested Shelduck from the Edo period. This species has been extremely rare, and close to extinction ever since its discovery in 1887. Recently three other old sketches of the Crested Shelduck have been reported, two of them by the present authors. In this paper twelve published sketches of the species from the Edo period have been introduced, and all twenty known sketches are arranged in order based on their characteristics and descriptions, and the status of its occurrence during the Edo period is discussed. In conclusion, we presumed that a few Crested Shelducks were imported from Kyohou period (1716-1735) and it actually migrated once or twice to Hokkaido (northern Japan), and was captured to be illustrated as a living bird.

はじめに

カンムリツクシガモは、かつて朝鮮半島とシベリア東端のウスリー川流域に生息し、現在は絶滅したと考えられるツクシガモ類の一種で、現在、世界に3点の標本が、第1標本(♀)はコペンハーゲン博物館に、第2標本(♀)、第3標本(♂)は山階鳥類研究所に残っているだけである。黒田長礼博士は1917年に第2標本を入手、研究して新種 *Pseudotadorna cristata* Kuroda, 和名カンムリツクシガモとして発表した(現在の学名は *Tadorna cristata*)。しかし、一方では雑種であるという説もあった。ところが江戸時代の鳥類写生図にカンムリツクシガモと同定されるものが発見され、新種説が有力となったのである。この経緯を既に柿沢(1988)が発表しているが、ここでは文献もあげて、カンムリツクシガモの新種として発表の経緯を簡単に、

Received 21 August 1989, accepted 21 August 1989

* Yamashina Institute for Ornithology, Konoyama, Abiko, 270-11 Japan

** Emeritus Professor of Tokyo University, 4-16-3 Seijo, Setagaya-ku, Tokyo, 157 Japan

新種発表直後に江戸時代の写生図にカンムリツクシガモの図が発見された経緯をやや委しく述べた後に、最近発見されたカンムリツクシガモの写生図について述べたい。

カンムリツクシガモの発見と新種発表の経緯

カンムリツクシガモの第 1 標本は、1877 年 4 月にウラジオストック付近で E. Irminger 大尉が発見し、コペンハーゲン博物館に所蔵された。その後コペンハーゲンの C. E. Lütken 博士がイギリスの Sclater 氏に標本を送り同定を依頼したところ、Sclater 氏はこの鴨をアカツクシガモとヨシガモの雑種、*Tadorna casarca* × *Querquedula falcata* (?) であると結論し、1890 年 1 月 14 日のロンドン動物学会で発表し、会誌に石版手彩色の図版と共に報文を載せている (Sclater 1890)。報文では性別不明とされているが、現在では雌であることが明らかになっている。

第 2 標本は 1916 年に朝鮮釜山付近で捕えられたものであるが、1917 年に黒田博士が入手、研究して新種として発表した (黒田 1917)。その標本の性別は不明であったが、仮に雄? とされていた。まだ博士は第 1 標本と Sclater 氏の報文の存在を知らなかったのである。博士がこの論文をイギリスの Hartert 博士に送ったところ、Hartert 博士は、Sclater 氏の報文をあげて、この鳥は雑種らしいとの考えを述べ、「もし新種ならば数個が採集され、かつ全ての個体の形態や色彩が等しくなければならない。もし個体ごとに異なれば雑種と考えられる」との手紙を黒田博士に送っている。ところが次に述べるように、江戸時代の鳥の写生図に、この鳥と形態や色彩のほぼ等しいものが数例発見されたことと、第 3 標本 (雄) が発見されたことから新種説が確実となり、また第 1 標本、第 2 標本が雌であることが明らかになったのである。第 3 標本は 1913 または 1914 年に朝鮮群山付近で 2 羽射止められたものの中の 1 羽である。黒田博士は 1923 年にこの標本を入手し、これが雄の標本であることを明らかにし、雄の成鳥としての記載とその写生図を発表した (黒田 1924)。雌の 2 点の標本を比べてみると、第 2 標本では眼の周囲の白色部分が環状であるのに対し、第 1 標本では眼の周囲の白色部分が額の白色部分とつながっている点が相違している。この相違は両者の年齢の差によるのかもしれない。この 3 例のほかに、カンムリツクシガモは 1900 年頃北京で (黒田 1924)、1916 年に北朝鮮海州付近で (黒田 1924)、1930 年に中国東北部 (満州) の瀋陽 (奉天) で (黒田 1939)、1943 年に南朝鮮牙山東南方で (黒田 1953)、1963 年にウラジオストック付近で (山階 1975) 発見されたとの報告があるが、いずれの場合も標本は残されていない。

新種発表直後に発見された江戸時代のカンムリツクシガモの写生図

カンムリツクシガモの新種記載発表の翌年 (1918 年) に内田清之助博士が、松平頼孝家に古くから伝わる「鳥づくし」の歌留多の中にある「朝鮮をし」という名の鳥の写生図がカンムリツクシガモと大変似ていて、胸部が黒いところ、冠羽が大きいこと、眼の周囲が白くないことだけが異なっていることから、この写生図の鳥はカンムリツクシガモの雄で、黒田博士の発表されたのは雌ではないかと推論した。さらに江戸時代の優れた鳥類解説書である堀田正敦*「観文禽譜」(1794-1829) に「朝鮮をしどり」の雌雄の記載があり、その雌の記載に「頂勝**が稍短

* 佐野藩主, (1755-1832). 若年寄, 本草愛好家, 「堀田禽譜」も著わす。

** 冠羽 (毛)。

かく、眼辺白く」とあるのは黒田博士の記載と一致するので、発表されたのは雌であるとの推論をさらに確かにした(内田 1918)。つぎに黒田博士は、自家に古くから伝わる鳥類写生図(島津重豪* が写生させたと考えられるもの)の中にカンムリツクシガモの雌雄と思われるものを発見し、その雌が発表された標本と一致することを見出した(黒田 1920)。ただし鳥名は記されていない。さらに黒田博士は松平直亮家所蔵の鳥類写生図(これも島津重豪が写生させたもの)に描かれ、「鴛鴦、真のおしどりに非ず、漢渡なるべし」と記された雌雄の鴨がカンムリツクシガモであること、また農商務省所蔵の「鳥類写生図」に‘てうせんをしどり’(竹齊**, 戊*** 二月写)と記された雌雄の鳥の図がカンムリツクシガモの正確な写生図であることを発表した(黒田 1924)。これだけこの鳥の写生図が発見されたことと、第 3 標本(雄)が発見されたことで、新種説が確立し、また第 1, 第 2 標本が雌であることが明らかになったのである。「観文禽譜」の朝鮮をし鳥の項に「享保の比舶来あり」と記されていることから、カンムリツクシガモは享保年間(1716-1735)以後朝鮮から飼鳥として輸入され、その写生図が残されたものと思われる。ところがこの他に直接、日本に飛来したことが江戸時代の写生図から知られている。文政 5 年(1822)に北海道函館付近の亀田村で捕えられた雌雄の鴨(カンムリツクシガモ)の写生図**** を矢野宗幹博士が 1939 年の動物学会大会に出品したことを山階芳麿博士が報告している(矢野 1940, 山階 1975)。

最近発見された江戸時代のカンムリツクシガモ写生図

上にのべたように、江戸時代のカンムリツクシガモ写生図が、1920 年代に 4 例発見され、さらに 1939 年に 1 例発表されているが、最近、さらに 3 例の発見がつけ加った。その一つは、磯野直秀、内田康夫両氏が、松森胤保*****「大泉諸鳥写真画譜」(1866-1883)の中で発見したもので、明治元年に江戸の鳥屋で‘リキウ鴨’の名で売られていたものの写生図がカンムリツクシガモの雄であることを明らかにした(磯野・内田 1988, 磯野 1988)。大変興味深い発見で、今後の委しい発表に期待したい。他の 2 例は、筆者らが、「観文禽譜」の著者である堀田正敦の著した図譜「堀田禽譜」(1790-1830)(東京国立博物館所蔵)中に、朝鮮鴛鴦雌雄、高須侯藏図と記したものと、朝鮮をしどり雌雄、多紀家藏図と記したものを発見したのである(菅原 1988, 柿澤 1988)。この二つの図は、「観文禽譜」の記載と一致していた。なお「堀田禽譜」は白井光太郎博士が「彩色の写生画で頗る精巧、解説亦周到、本邦禽譜中他に比肩すべきものを見ず」と絶賛されているように、江戸時代の鳥類図譜の中で最も優れたものの一つである。以上の 8 例が江戸時代(明治元年の 1 例を含む)のカンムリツクシガモの写生図として最近までに発見されたものである。

今回発表する江戸時代のカンムリツクシガモ写生図

筆者らは、ここに江戸時代のカンムリツクシガモの写生図の新しい発見、12 例の報告をした

* 島津藩主、(1745-1833)、本草愛好家、「鳥名便覧」の著者、「成形図説」を刊行。

** 加藤竹齊、幕末、明治初期の本草画家、「鳥類一覧」(明治 8 年)、「博物館禽譜」(明治 6 年)に描画。

*** 天保 9 年(1838)か嘉永 3 年(1850)。

**** 磯野直秀博士はこの写生図が現在、長谷川仁博士所蔵であることと、同博士の許可でその写真を撮影されたことを筆者らに教えられ、写真を筆者らに閲覧させて下さった。

***** 江戸時代に松山藩家老、明治時代に県会議員、博物学の研究者、「両羽博物図譜」を著わす。

い。単に新しい発見をつけ加えるだけでなく、今までに発見されたものすべてを含めて、全体を系統だてて考察したい。その場合に基準としたいのは、表 1 の ⑦「堀田禽譜」の朝鮮鴛鴦(高須侯* 蔵図)と ⑧「堀田禽譜」の朝鮮をしどり(多紀家** 蔵図)と第 1, 第 2, 第 3 標本である。⑦と⑧を基準としたのは図が精密に描かれている以外に、委しい記載を伴っているからである。さらに「観文禽譜」の記載も利用することができるので都合がよい。⑦⑧の朝鮮をしどりの図は享保(1716-1735)以来、朝鮮から飼鳥として輸入されたものを写生したもの、あるいは写生図を模写したものと考えられるが、いずれもつぎの「観文禽譜」の記載と一致している。「頂黒く黒き勝^{かざり}あり 眼下より喉灰白 背灰黒色にして赤黄を帯 翅に碧白毛あり 臆黒く腹灰色にして黄赤を帯 尾黒し 嘴は桃色にして黄を帯 脚亦^{ちやうしやう}同じ」(勝は冠羽のこと)の記載は⑦⑧の雄の特色を示している。さらに雌に関しては、「雌は頂勝稍短かく 眼辺白く嘴の根より喉白し 胸腹及背灰黒にして黄赤を帯 翅白碧 嘴脚雄と同じ」(頂勝は冠羽のこと)の記載があり、⑦⑧の雌と一致している。また黒田斉清***「本草啓蒙補遺」にも簡単ではあるが朝鮮鴛鴦に関しつぎのような記載「灰色にして黒き毛冠あり 雌なる者は嘴の元より眼傍にかけ白し」がある。ところが⑦の高須侯蔵図と⑧の多紀家蔵図を比べると少し差のあることに気づく。⑦の雄は第 3 標本に、雌は第 2 標本に大変似ていて優れた写生図であることを示している。ところが⑧の雄は、第 3 標本と少し異なっている。第 3 標本では、頭部の頂きから眼の下辺までが黒く、それから下方が灰白色であるのに対し、⑧の雄では、眼の下に水平に白色の帯状の部分があることである。一般に黒色の部分と灰色の部分隣り合っていると、対比により、灰色部のうちで黒色部に接した小部分が白味を帯びるようにみえることがあり、雄のカヌムリツクシガモの写生図のうちには、眼の下に細い淡灰白色の帯を描いているものもある。⑧の雄の図で広い白色の帯が描かれているのは、本来は細い淡灰白色の帯としてみえるものを、不正確な写生で白色の帯として描き、それを模写した際に幅が広がったのではないかと考えられる。⑧の図は様式化された図であって、写生図ではなく模写したものと思われる。また⑧の図が⑦の図と異なるのは雨覆が白色であることが示されていない点であるが、カモ類では背の羽が雨覆をおおうことが多いので、白色部分が見えないことは不自然ではない。今、仮りに⑦を高須侯型(正確な写生図)、⑧を多紀家型(ある種の模写図)と名づけ、この二つを基準型として、今までに発見された図を見ると、1 例(④の雄)を除いてこのいずれかの型に分けられるように思われる。①の「鳥づくし」歌留多の中で「てうせんをし」として描かれた図は高須侯型の雄でかなり正確に描かれている。②の島津重豪が写生させたと考えられる雌雄の無名の鳥は、多紀家型である。③も島津重豪が写生させたといわれるもので、「漢産の鴛鴦」と記されている雌雄の鳥も多紀家型であるが、これはかなり様式化されたものである。また③の雌は⑧の雌と姿勢が同じことに気づく。したがって③と⑧は、同じ系統の図から模写したものである可能性が高い。④竹斎画「てうせんをしどり」雌雄の図は大変正確に描かれた写生図である。その雄は高須侯型であるが、雌は高須侯型でも多紀家型でもなく、第 1 標本に似ている。それは目の周囲の白い部分が額の白い部分とつながっているということである。⑤の写生図(長谷川仁博士所蔵)の写真は磯野直秀博士の御好意で閲覧することが

* 松平義和(1776-1822)、美濃高須藩主、尾張徳川家の分家。

** 多紀元簡(1754-1810)、奥医師。

*** 筑前福岡藩主(1795-1851)、本草愛好者として有名、「鴛経」を著す。

できたが、その写真によると、⑤は⑨の生替鴨^{ふがわり}とはほぼ一致するもので、その雌は第1標本と似ている。以上が従来発見されたものである。

最近発見された⑥松森胤保画‘リキウ鴨*’は高須侯型の雄であり、かなり正確な写生図である。⑦⑧については既に説明した通りであるが、⑧について「観文禽譜」に「蘭山も亦此鳥の写真蔵す。これが傍に書して真かもより稍大にして脚高しとあり」とあるのをつけ加えておき、後で引用することにした。

これから今回の発表に移ることにしたい。⑨^{ふがわり}生替鴨(朝鮮をしどり)雌雄の図は「堀田禽譜」(前掲)につぎの記載と共に載せられている。「文政五年戊**午冬十月箱館領亀田村近辺一本木古堀にて 一番目谷元次郎足輕村田亀之丞繫縄を以て是をとる 明年己**未9月8日家臣藤倉官五これを官府に献ずといふ 文政六癸未七月九日松前志摩守より生替鴨といひてこれを献ず 今按るに朝鮮をしどりなるべし 毛色の少しく差あるは嫩鳥^{わか}にやあらん」。つづいて⑩‘ふがはりかも’雌雄の図が「堀田禽譜」につぎの記載と共に載せられている。「これも松前にて捕し 処なり これ等朝鮮をしとりと同物とみゆ」。ここで注意したいのは⑨⑩の図の貼り方に誤りがある点である。本来⑨⑩それぞれに一番^{つが}いが描かれているはずなのに⑨に雄、⑩に雌雌となっているので、⑨の2番目の雄と⑩の1番目の雌を入替えると、筆使い、彩色、冠羽の長さのそれぞれ揃った番いが2組得られる。このように整理したものを⑨⑩図として扱うことにする。⑨の亀田村で捕えられたものは、高須侯型のものとなかなり異なっている。すなわち、体形がオンドリに似て足が短く、冠羽がやや短く、雄の胸があまり黒くなく、雌の目の周囲の白い部分が広く、あまり正確な写生図とはいえない。雌の場合は、第1標本と似ていて、竹斎の描いた④の雌に似ている。堀田正敦が⑨の解説で「毛色の少しく差あるは、嫩鳥^{わか}にやあらん」といっているのは正しいのかも知れない。⑨の雌雄は、亀田村で捕えたという⑤の雌雄とはほぼ一致している(磯野博士の写真による)。⑩は松前のどこかで捕えられたもので、捕獲の年月も不明であるが、羽毛の描きかたからみると正確な写生図であることがわかる。これは明らかに高須侯型である。⑪朝鮮鴛鴦 雌雄、⑫替鴨(朝鮮をし)雌雄は「水禽譜」に載っている。「水禽譜」(国立国会図書館所蔵)は編者不明で、江戸末期のものとされていて、77種の水禽の図を集めたすぐれた図譜である。おそらくは堀田正敦と親しい関係にあった大名が編集したものであろう。⑪、⑫も高須侯型で、両方とも「堀田摂津守殿蔵図文政七年八月到来」と記されていて、⑪は⑦の図、⑫は⑩の図を模写したことが示されている。⑫の図には「文政六未年七月九日松前より替鴨として献ず」と記されているので、亀田村で捕えられたと考えていたのであろう。⑬鴛鴦(てうせんをし)、雌雄は「啓蒙禽譜」(国立国会図書館所蔵)に載っている。「啓蒙禽譜」は優れた鳥類図譜であり、その編著者は不明であるが、伊藤篤太郎博士により前田利保***ではないかと推定されている。⑬は高須侯型である。鴛鴦とされているのは、当時日本のオンドリを中国の鳥の鴛鴦とするか、鵞鵝^{けいちよく}とするかの2説があり、オンドリを鵞鵝とすると、鴛鴦は外国産でオンドリに似たものということになるので、「啓蒙禽譜」の著者が、‘てうせんをし’を鴛鴦に当てたものと考えられる。⑭をし鳥、雌雄の図は牧野貞幹****「鳥類写生図」4軸(国立国会図書館所蔵)に載っている。目録には著者名が載っていないが、この軸

* 利休色(緑がかった灰色)の鴨の意と考えられる(磯野・内田 1988, 磯野 1988)。

** 戊は壬、己は癸とすべきもの(原文の誤)。

*** 富山藩主、(1800-1859)、江戸の本草愛好グループ椿鞭会のリーダー。

**** 常陸笠間藩主、(1787-1828)、本草愛好者で本草画家、藩政改革で有名。

に捺されている判で牧野貞幹であることがわかる。牧野貞幹は同名の画集「鳥類^{えんめう}写生図」38枚(国立国会図書館所蔵)も著している。⑭は高須侯型である。鳥名が⑬のように鴛鴦としてあれば一理あるが、をし鳥としてあるのは不適当である。⑮ 亀田鳧、雌雄は瀧澤解(馬琴)「禽鏡」6軸(1834)(東洋文庫所蔵)にのっている。馬琴は飼鳥に熱心で本草にも委しかった。「禽鏡」は女婿渥美赫洲の描いた鳥の図に馬琴が鳥名をつけ解説したもので優れた禽譜である。⑮は⑫を模写したものと思われ高須侯型である。亀田鳧の名前は、亀田村で捕えられた鴨の意味で名づけられたものであろう。亀田鳧の名は現在のところこの禽譜の中だけに見出されている。⑯は鳥名は記されていないがカンムリツクシガモの雌雄で、「唐船持渡鳥類」(東京国立博物館所蔵)にのっている。「唐船持渡鳥類」は編者不明で、文政一天保七写(1820-1836)と記され、蘭船、唐船で長崎に舶来した鳥のすぐれた写生図の写本である。⑯は高須侯型であるが、本来灰色である雄の背と腹が灰白色に描かれているのは、やや正確を欠いていると思われる。⑰の朝鮮鴛鴦(雄)は「長崎渡来鳥獸図巻」(1839頃)にのっている。この図巻には、天明7年(1787)から天保10年(1839)にかけ蘭船、唐船で舶来した鳥の写生図と「百鳥図」(清、余曾三画)から模写した画が含まれている。⑰は高須侯型であるが、⑯のように背が灰白色に描かれているものを模写した際に更に白く描いたものであろう。⑱の朝鮮鴛鴦は田中芳男編「博物館禽譜」3帖(1875-1879)(東京国立博物館所蔵)にのっている。田中芳男^{*}は江戸時代からの本草画家(服部雪斎、中島仰山ら)に啓蒙的な博物学の図を描かせ木版画や銅版画にして刊行したが、これとは別方向で、「博物館禽譜」では、関根雲停、中島仰山、服部雪斎等に、従来の方法での彩色写生画を描かせたり、これらの画家の江戸時代に描いた作品を集めたもので、江戸時代からの鳥類写生画の集大成ともいえる貴重な画集である。⑱の鳥は多紀家型である。鳥名朝鮮鴛鴦の脇に「真鴨より稍大にして脚高し」と書かれているところから蘭山蔵図を直接または間接に模写したものと思われる。⑲は鳥名は記されていないがカンムリツクシガモの雄で、万延元年(1860)12月17日、川村老岐守^{**}としてあり、本草画家、関根雲停^{***}の描いた力強い優れた写生画である。この図はおそらくは川村老岐守所持の鴨を雲停が写生したものと思われる。⑳ は「リキウカモ」、朝鮮ヲシドリと記され、「博物館禽譜」にのっている。文久元年(1861)8月11日写と記されている。これも関根雲停の描いたカンムリツクシガモ(雄)の写生図である。㉑の「リキウ鴨」と同じ名が、朝鮮ヲシドリと併記されていることは重要である。㉑と㉒は1年違いで共に雄で同じ画家が描いているので同一の個体ではないかと思われる。㉑も雄のみであり㉒と同じに「リキウカモ」と呼ばれていることは興味深い。また㉑と㉒とは7年違いであり、飼育下の鴨類の寿命の範囲内であることから、㉑と㉒は同一個体である可能性がある。

①から㉒までをまとめると、多紀家型が4例(②③⑧⑱)、第1標本と一致するものが3例(④の雌、⑤の雌、⑨の雌)、他の雄の16例と雌の13例は高須侯型(第2、第3標本と一致するもの)である。多紀家型は、ある不正確な写生図を模写した一系統ではないかと考えられ、不正確な点(雄の眼の周辺の描写)と、類型化が認められる。④の雌は、第1標本と似たものが少くとも1回、天保、嘉永年間に輸入されたもの、⑤の雌、⑨の雌は第1標本

* 江戸時代の本草学者、(1838-1916)、明治時代になって博物学の啓蒙に貢献した。

** 旗本、(1795-1877)、長崎奉行、大阪町奉行等を歴任。

*** (1804-1877)、緒鞭会員のために写生画を描く、明治になって博物局の画工。

表 1. 江戸時代の写生図に見出されたカンムリツクシガモ

	鳥名	年代	筆者	図 譜	所 在	発 表 者
従 来 発 見 の も の	①	てうせんをし(朝鮮鴛鴦)雄		「鳥づくし」歌留多	松平頼孝*	内田(1919年)
	②	——— 雌雄		島津重豪「鳥類写生図」	黒田長礼**	黒田(1920)
	③	鴛鴦 漢渡 雌雄		島津重豪「写生図」	松平直亮より 黒田長礼**	黒田(1924)
	④	てうせんをしどり 雌雄 戊二月 竹斎		「鳥類写生」下	農商務省*	黒田(1924)
	⑤	——— 雌雄 文政五, 松前亀田村で捕獲		鳥類写生図(1818-1829)	矢野宗幹***	山階(1975), 矢野(1940)
最 近 発 見 の も の	⑥	リキウ鴨 雄 明治元年 松森胤保		「大泉諸鳥写真画譜」	松森家	磯野・内田 (1988) 磯野(1988)
	⑦	朝鮮鴛鴦 雌雄 高須侯蔵図		堀田正敦「堀田禽譜」 (1790~1830)	東京国立博物館	柿澤(1988), 菅原(1988)
	⑧	朝鮮をしどり 雌雄 多紀家蔵図		堀田正敦「堀田禽譜」 (1790~1830)	東京国立博物館	柿澤(1988), 菅原(1988)
今 回 発 表 の も の	⑨	ふかいり 生替鴨(朝鮮をしどり)雌雄 文政五函館亀田村で捕獲, 文政六松前志摩守より献上,		堀田正敦「堀田禽譜」 (1790~1830)	東京国立博物館	
	⑩	生替鴨(朝鮮をしとり)雌雄 松前で捕獲		堀田正敦「堀田禽譜」 (1790~1830)	東京国立博物館	
	⑪	朝鮮鴛鴦 雌雄 堀田撰津守の図		「水禽譜」(1820)頃	国立国会図書館	
	⑫	かへり 替鴨(朝鮮をし) 雌雄 堀田撰津守の図		「水禽譜」(1820)頃	国立国会図書館	
	⑬	もん 鴛鴦(てうせんをし) 雌雄		「啓蒙禽譜」(1820)頃	国立国会図書館	
	⑭	をし鳥 雌雄 牧野貞幹		牧野貞幹「鳥類写生 図」(1820)頃	国立国会図書館	
	⑮	亀田晃 雌雄 渥美赫洲		滝澤馬琴「禽鏡」(1834)	東洋文庫	
	⑯	——— 雌雄		「唐船持渡鳥類」 (1820~1836)	東京国立博物館	
	⑰	朝鮮鴛鴦 雄		「長崎渡来鳥獣図巻」 (1839)	東京国立博物館	
	⑱	朝鮮鴛鴦 雌雄		田中芳男「博物館禽譜」 (1875~1879)	東京国立博物館	
	⑲	——— 雄 川村き岐守 万延元年 関根雲亭		田中芳男「博物館禽譜」 (1875~1879)	東京国立博物館	
	㉔	リキウカモ, 朝鮮ランドリ雄 文久元年 関根雲亭		田中芳男「博物館禽譜」 (1875~1879)	東京国立博物館	

* 現在の所在は不明, ** 戦災により焼失, *** 現在は長谷川仁博士所蔵(磯野直秀博士による)。

と似たものが少なくとも 1 回、文政年間に北海道に飛来したものを写生したのであろう。高須侯型のほとんど全部は、享保の頃から、明治に近い江戸末期にかけて何回か朝鮮から飼鳥として輸入されたものが、正確に写生され、または正確な写生図が精密に模写されたものであろう。その他に文政 5 年の頃、北海道函館付近(亀田村)その他に飛来したものが捕えられ、写生され、模写されているのである(⑤ ⑨ ⑩ ⑫ ⑮)。

お わ り に

現在では絶滅鳥と考えられているカンムリツクシガモに関して、江戸時代の鳥類図譜に描かれている図および記載から、この種の我が国への渡来状況を調査したのが本論文である。筆者らが今回発表した12点の新資料と既に発表されている8点の計20点のすべての資料について、絵の傾向を系統だて総合的判断を試みた。今後、多くの江戸時代の鳥類図譜が調査研究されれば、カンムリツクシガモに関する新事実が発見されるであろう。それらの資料を基に、より正確な本種の我が国への渡来状況が明らかになることを筆者らは期待している。

本研究をすすめるにあたり、大変多くの方々の援助に負うところが多かった。まず第一に本論文を東京大学名誉教授 故内田清一郎博士に献じたい。筆者らは、内田博士の勧めにより江戸時代の鳥類図譜に描かれた種名の調査に着手した。この研究のために貴重な資料の閲覧、複写の便宜を与えられた東京国立博物館資料館、国立国会図書館、国会図書館支部東洋文庫の館員各位、特に貴重な教示を賜った東京国立博物館考古課長（前資料部資料第一研究室長）佐々木利和氏に深い感謝の意を表明したい。さらに貴重な教示を賜り、貴重な写真を御提供下さり、閲覧させて頂いた慶応大学教授磯野直秀博士に深い感謝を捧げる。またこの研究に援助を与えられた山階鳥類研究所の所員各位に、特に報文を校閲していただいた同研究所・所長黒田長久博士に深く感謝します。

文 献

- 磯野直秀, 1988. 松森胤保著『鳥獣虫魚譜』p. 112. 八坂書房.
磯野直秀・内田康夫, 1988. シラオネツタイチョウを山形で発見. 日本の生物 2 (11): 41-45.
柿沢亮三, 1988. 絶滅鳥カンムリツクシガモ. 「江戸の動植物図」 pp. 124-125. 朝日新聞社.
Kuroda, Nagamichi, 1917. On one new genus and three new species of birds from Corea and Tsushima, *Tori* 1 (5): 1-3.
黒田長礼, 1920. カンムリツクシガモの雌雄について. 鳥 2 (9): 239-242.
黒田長礼, 1924. 稀れなるカンムリツクシガモの第3標本に就て. 鳥 4 (18): 171-184.
黒田長礼, 1939. カンムリツクシガモ. 「雁と鴨」 p. 43. 修教社書院.
黒田保吉, 1953. 朝鮮内における特殊鳥類の渡来季その他に就て. 鳥 13 (62): 29-35.
Slater, P. L. 1890. Exhibition of, and remarks upon, a hybrid duck (Plate I), *Proc. Zool. Soc. London* 1890: 1-2.
白井光太郎, 1931. 鳥に関する古書に就て. かひどり 2 (7): 23-31.
菅原 浩, 1988. 堀田正敦侯の「堀田禽譜」, 「江戸の動植物図」 pp. 119-120. 朝日新聞社.
内田清之助, 1918. カンムリツクシガモに就て. 鳥 2 (6): 6-8.
矢野宗幹, 1940. 第15回日本動物学会大会記事, 展覧会出品目録, 鳥五種類, 文政(1818-1829), 動物学雑誌 52: 36.
山階芳麿, 1975. カンムリツクシガモ. 山階鳥類研究所編「この鳥を守ろう」 p. 98. 霞会館.

柿沢亮三: 山階鳥類研究所 〒270-11 我孫子市高野山
菅原 浩: 東京大学名誉教授 〒157 東京都世田谷区成城 4-16-3

Fig. 1. カンムリツクシガモの第 1 標本 (♀),
ロンドン動物学会報 (1890) より転載。

Fig. 2. カンムリツクシガモの第 2 標本 (♀),
タイプ標本, 山階鳥類研究所所蔵。

Fig. 3. カンムリツクシガモの第 3 標本 (♂),
山階鳥類研究所所蔵。

Fig. 4. てうせんをし (朝鮮鴛鴦) 雄, 松平頼
孝氏蔵「鳥づくし」歌留多, 内田 (1919)
より転載。表 1 の ① にあたる。

Fig. 5. 無名 雌雄, 島津重豪「鳥類写生図」,
黒田 (1920) より転載。表 1 の ② に
あたる。

Fig. 6. 鴛鴦漢渡 雌雄, 島津重豪「写生図」
黒田 (1923) より転載。表 1 の ③
にあたる。

Fig. 7. てうせんをしどり 戊二月 竹斎 雌(左), 雄(右), 農商務省所蔵「鳥類写生」下, 黒田(1923)より転載。表1の④にあたる。

Fig. 8. 朝鮮鴛鴦 高須侯蔵図 雌(左), 雄(右), 堀田正敦「堀田禽譜」, 東京国立博物館所蔵。表1の⑦にあたる。

Fig. 9. 朝鮮をしどり 多紀家蔵図 雌雄, 堀田正敦「堀田禽譜」, 東京国立博物館所蔵。表1の⑧にあたる。

Fig. 10. リキウ鴨 雄, 松森胤保「大泉諸鳥写真画譜」松森家所蔵, 磯野博士撮影。表1の⑥にあたる。

Fig. 11. ^{よかいり}生替鴨 (朝鮮をしどり) 雌 (左), 雄 (右), 堀田正敦「堀田禽譜」, 東京国立博物館所蔵。
表 1 の ⑨ にあたる。

Fig. 12. 生替鴨 (朝鮮をしどり) 雌 (左), 雄 (右), 堀田正敦「堀田禽譜」, 東京国立博物館所蔵。
表 1 の ⑩ にあたる。

Fig. 13. 朝鮮鴛鴦 雌雄, 「水禽譜」, 国立国会図書館所蔵。表 1 の ⑪ にあたる。

Fig. 14. ^{かほり}替鴨 (朝鮮をし) 雌雄, 「水禽譜」, 国立国会図書館所蔵。表 1 の ⑫ にあたる。

Fig. 15. 鴛鴦 (てうせんをし) 雌 (左), 雄 (右), 「啓蒙禽譜」, 国立国会図書館所蔵。表 1 の ⑬ にあたる。

Fig. 16. をし鳥 雌 (左), 雄 (右), 牧野貞幹「鳥類写生図」, 国立国会図書館所蔵。表 1 の ⑭ にあたる。

Fig. 17. 亀田鴨 雌 (左), 雄 (右), 滝澤馬琴「禽鏡」, 東洋文庫所蔵。表 1 の ⑮ にあたる。

Fig. 18. 無名 雌(左), 雄(右), 「唐船持渡鳥類」, 東京国立博物館所蔵。表 1 の ⑩ にあたる。

Fig. 19. 朝鮮鴛鴦 雄, 「長崎渡来鳥獣図巻」, 東京国立博物館所蔵。表 1 の ⑪ にあたる。

Fig. 20. 朝鮮鴛鴦 雌雄, 田中芳男「博物館禽譜」, 東京国立博物館所蔵。表 1 の ⑫ にあたる。

Fig. 21. 無名 雄 関根雲停画, 田中芳男「博物館禽譜」, 東京国立博物館所蔵。表 1 の ⑬ にあたる。

Fig. 22. リキウカモ, 朝鮮ツクシガモ 雄, 関根雲停画, 田中芳男「博物館禽譜」, 東京国立博物館所蔵。表 1 の ㊤ にあたる。